

Title	〔寄稿〕 「資本論」の方法と「伝統」：飯田裕康氏の批評にたいする一つの反論
Sub Title	〔Communication〕 The method in Marx's capital and the conventionalism : a rejoinder to the review by Mr. H. Iida
Author	桜井, 毅
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1963
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.56, No.9 (1963. 9) ,p.874(86)- 879(91)
JaLC DOI	10.14991/001.19630901-0086
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19630901-0086

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〔寄稿〕

『資本論』の方法と「伝統」

——飯田裕康氏の批評にたいする一つの反論——

〔Communication〕

The Method in Marx's Capital and the Conventionalism
—a rejoinder to the review by Mr. H. Iida—

武蔵大学 桜井毅

マルクスの生産価格論については昔から多くの批判があり、その大部分はまったくとるにたぬものといつてよいのであるが、しかしマルクスの生産価格論がなお不明確な点をのこしていることは事実であり、それを無視することは学問的にゆるされることではない。そのひとつの問題が、近年いわゆる「転形問題」として議論の対象になっているのであるが、その問題が従来議論とはまったく性格を異にするあたらしい問題提起をふくんでいる以上、それについてマルクスがどのようにかんがえ、どのように処理しているか、あるいはなお処理しきれない面をのこしているかをあきらかにすることは、マルクス経済学をまなぶものの当然の責務である。われわれの『マルクス価格理論の再検討』が、その解決へのアプローチを

どのように評価されるかは別としても、すくなくともあたらしい問題提起をうけとめ、自己のものとして解決を志向し、一応の見通しをあたえようという正当な問題意識の上にたつものであったことは、まずことわっておかなくてはならない。

この本については、すでにいくつかの論評があらえられているのであるが、最近になって慶応大学の持丸悦朗、飯田裕康両氏によってあらたな見解に接することができた。(『三田学会雑誌』第五十六巻第四号所載)もつとも、この書評は両氏の連名であるが、内容はまったく二分され、各部は両氏によってまったく独立に書かれており、共通するところはなにもないといつてよいものである。前半の持丸氏の論評が、問題の所在を適確に把握されているのにたいして、「伝統的立場からの見解」といわれる後半の飯田氏の批評は、論点をはなだ錯雑しており、明瞭にその内容を把握することができないのであるが、根本的に異なる理論的立場にあることを強調されていることだけは、明白にうかがうことができる。

もとよりその書評は、『マルクス価格理論の再検討』全体にたいするものであるが、持丸氏が明確に指摘されるごとく、この論文集における個々の論文はかならずしも理論的立場を共通にしているわけではない。したがってその批評にこたえるとしても、それは各自の理論的立場で独立にこたえる以外にはありえないであろう。そして、すくなくともマルクスの生産価格論を堅持する立場をとる筆者にとつて、マルクス経済学の「伝統的立場からの見解」といわれるものにたいしてあらためて自己の見解をのべる義務を感じるのも、

それは当然の責任としてなのである。

前置がなくなつたが、以上のような理由で、ここではもっぱら飯田氏の批評についてその批判点を整理し、あわせて若干筆者個人のそれにたいする見解をのべて反論をこころみたいとかんがえる。いうまでもなく、これは筆者のまったくの個人的見解であつて、『マルクスの価格理論の再検討』における他の論者の見解を代弁するものではない。当然のことながら、そのことははっきりことわっておかなければならない。

氏の提起される問題の第一点は、近代経済学における価格理論とマルクス経済学における価格理論とを、同一平面上でとらえることが可能かどうかという点である。氏は一面で、それは「不可能だ」というのでなく、あくまでも可能なものとかんがえなくてはならない」とのべられながら、他方で「マルクス価格理論とよばれるものが、『資本論』の体系的理論という見地からいかに論定されるべきか」を明白にしなければ、それは「まったく無意味なこころみ」であるとされ、その点をさらに追求することによって、マルクス経済学と近代経済学がそれぞれ異なる独自の方法の上に構築された理論であることの認識が深まる、といわれるのである。

しかしながら、マルクス経済学と近代経済学との方法のちがいは、なにもマルクスの生産価格論の『資本論』体系での位置づけの「論定」をまつまでもなく、周知のことからである。もともとマルクスの生産価格論を近代経済学の価格理論と同一平面上でとらえて

いるという氏の批判の根拠は、はなはだ薄弱である。そしてまた、すくなくとも拙稿については、マルクスの生産価格論を『資本論』の体系的理解という見地からいかに論定されるべきか」をまさに問題にしているのであるから、この氏の批判の第一点は、その「論定」自身の当否を論ずるものでなければ、「まったく無意味なこころみ」というほかないであろう。

もちろん、飯田氏がその「論定」自身をつぎに批判の俎上にのせられたことは、当然であつた。すなわち氏は、「転形問題」の解明なしにはマルクス生産価格論の正当性を主張できないとするのは、価値と生産価格との「両範疇がいかなる地位にたつているか」という意識を基軸として『価値法則』による規制という点に論点を集中しようという意図なのである」と断定され、それはまた、価値法則の「原理・命題が『資本論』の内部でどのような形態で展開されるか」ということを問題にすることにもなる」として、その背後の「二つの重要な前提」をつぎに吟味されるのである。氏がここで指摘される「意図」ないしは問題意識について、それをまったくあやまれる意図として評価され、問題の出発点自体の誤謬を指摘されることによつて全体の論旨を否定されようとしたのか、それともそうでないのか、ということとは、ここでは判然とせず、また、ふたたびこの論点がくりかえされることなくその書評が終っているのか、くわしくその「意図」するところを理解することはできない。したがって、つぎに、われわれの理解の背後に横たわる「二つの重要な前提」といわれるものの吟味そのものの検討にうつることしよう。氏自身

も、その「意図」にたいする批判を、「前提」の吟味にまかせているようにかんがえられるからである。

「二つの重要な前提」の第一のものといわれるのは、氏によれば、端的には「生産価格を価値形態との論理的連繫においてとらえること」とであり、生産価格を「価格範疇」のものとしてとらえることである。氏は拙稿から引用されつつ、その観点によって「問題は価値形態論のうち解消され、また『総過程』をも流通過程論に矮少化することになり、『転形問題』自体空論化するおそれなしとしない」とのべられ、それについて氏の積極的主張として、「問題の核心を形態規定の展開をもってしてはとらえられない基礎的諸範疇の展開の法的把握の可能性のうち求めなくてはならない」ことを、そして、「生産価格をあくまでも価値範疇の問題としてとらえなければならぬことをあげられる。この点に関する氏の積極的主張は以上の指摘にとどまるだけで、その内容の説明がなされていないので、憶測のおちいりやすい危険をさけるためにも、ここでは意味のとりにくい氏のこの主張にはふれないでおこう。それは今後の氏の実質的な展開に期待することにして、われわれがなぜ生産価格を「価格範疇」のものとして説かざるをえないかの理由を簡単に述べたくわえて、その意図するところをあきらかにしておきたい。

飯田氏の引用された拙稿がすでにその意味をあきらかにしていたとかんがえられるのであるが、その要旨は、資本家が商品の生産に必要なものを、直接に価値を構成するものとしては把握できず、間接的に費用価格としてしか把握できないという点にある。そして、

資本の競争を媒介して成立する利潤率の均等化傾向そのものは、そのような貨幣形態でとらえた費用価格を基礎にする以外にないのである。『資本論』第一巻、第二巻においては、「資本一般」の範囲内で、すなわち、他の資本を前提することなしに資本と賃労働との関係のなかで、労働力の使用価値のもつその一般的性質が、あらゆる社会形態に共通な労働過程を資本の生産過程に包摂し、流通過程を資本価値のたんなる姿態変換の過程にすぎないものとする、資本自身の内的な関係としての価値編成を可能にした。そして、労働価値説もそのようなものとして論証された。しかし第三巻は、資本家的生産の成果たる剰余価値を、利潤、利子、地代などの分配諸範疇に分化しながら、社会的再生産過程を個別資本の競争の運動を媒介にして、統一的な社会的な有機的編成をなしとげてゆく過程をあきらかにするものである。そこでは各個別の資本は、利潤における量的比較をもって、相互の競争の基準を設定する。資本はこのように量的に比較可能な貨幣価格でとらえられた利潤の形態において、社会的生産の編成を流動的に可能ならしめるのであって、それ以外に社会的生産の価値規制をうけとめ、みずから社会的生産の資本家の編成をおこなってゆく形態はありえないのである。

もちろんこのことは、飯田氏の指摘されるように、たしかに「総過程」を流通形態の展開のうちに説くことに間違いはない。しかしそれは、たんなる流通形態に「矮少化」されるわけではない。それは、すでに生産過程が媒介され、実体が把握されたものとして登場しているのであって、たんなる商人資本的な形態規定とおなじもの

であるはずもない。したがって、その点から氏がなぜ「転形問題」自体、空論化するおそれなしとしない」といわれるのか理解することができない。「空論化」とか「矮少化」とかいう言葉の意味ははっきりさせないと、議論そのものが空転するおそれなしとしないのである。

しかもまた、生産価格を「あくまでも価値範疇の問題としてとらえる」という氏の主張によって、生産価格は一体どのように規定できるであろうか。平均利潤の形成は、資本の有機的構成の低い部門から高い部門への、剰余価値の現実の移動を意味することにでもなりはしないであろうか。拙稿でもすでにのべたように、商品の価値がそれに対象化された労働量によってその大いさを計られているのに対応して、生産価格をあたかもそれ自身に価値とは別の大きさの労働量が投下されたものとして、交換比率を確定されるものとかんがえるとしても、その場合に、概念を実体化して、剰余価値量そのものが価値の生産価格への転形にともない、有機的構成の低い資本部門からその高い部門へ移動するもののようにかんがえることが無理であることは、ただちに理解されうることであろう。それこそまさに、「空論化」されたものといえよう。

もとよりマルクスが、『資本論』第三巻の展開において、資本主義的な「競争」の意義を明白に理解し、生産価格を価格形態において価値規定を媒介する具体的形態として設定しながら、価値と価格との区別をあいまいなままで等価交換を修正するものとして生産価格を説くという、いわば古典経済学的な残滓を、その方法において

かなり濃厚にのこしていることは事実であるが、それはマルクスがみずからあたらしく確立した第三巻の方法を十分徹底していなかったというべきなのである。マルクスの経済学のプランの変遷のうちにもみられる「競争」の意義の確定が、比較の後期のものであることによって、それは説明されるのではないとかんがえられる。したがって、マルクスの「問題の核心」は、むしろ古典経済学をこえるあらたな方法にあるというべきなのであって、「価値範疇の問題として説く」ことが「問題の核心」をもとめることにはならないのである。

さてつぎに、氏のあげられる第二の点をみてみよう。これは文脈からすれば当然さきの「二つの重要な前提」の第二のものでなければならぬが、第一のものと並列しているのではなくて、第一の前提からむしろみちびきだされるものとされる。すなわち生産価格を「価値範疇」でなく「価格範疇」としてとらえることによって、「生産価格を市場価格から逆に展開する方法が基礎にある」と断定されているのである。この断定の根拠はとくにしめされているわけがないので、そのような聞きなれない方法の肯定も否定もできにくい。そしてその必要もないとおもわれるが、すくなくとも生産価格が流通形態として把握されることが、その原因を必然的にうみだすという氏の断定の仕方には疑問がある。すでにのべたように、社会的生産の資本家的編成を個別資本の運動をとおしておこなってゆく形態として、まず生産価格が価格形態として説かれなければならないのであって、逆にいえば、その価格を通ずる資本の競争によってはじ

めて、資本は資本主義的生産の社会的総体を形成することが可能になるのである。マルクスの『資本論』第三巻の方法はそのように理解すべきなのであって、氏がこの「視角をまったく問題外にして論をすすめている」のは、むしろ論外であるといわなくてはならない。氏が、『資本論』第三部の第一、第三篇を生産力の展開過程に諸資本が総体的にとる運動の具体的諸形態を展開したものとかんがえる(傍点は引用者)時、氏は、『資本論』が資本主義社会の経済的運動法則を原理的に説明するものであることを忘却せられ、なお単純商品の価値が、生産力の発展にもとない、資本主義的商品の生産価格に実質的に(投下労働量の変化として)転形されるものという、素朴で誤った議論に低迷されているのであろうか。しかし、そのようなことは、『伝統的立場』をまもる氏にしても、やはり信ずることができないであろう。もしそれが『伝統的』理解だとすれば『伝統的立場』はそこでは意味のない、たんなる形骸にすぎないからである。

氏は以上のように、二つの前提自身の吟味によって、われわれの方法は、「たとえ一つの仕方であるにしても、上向的論理をもって発展するマルクス価格理論を真に説明しうる論理をもったものとする」ことは、方法的に不可能である」と結論される。しかし、氏の論点にたいしては、すでにその正当ならざる理由をのべた。したがって氏の結論自体も、氏に返上するほかない。しかし、氏が結論をみちびく際——ただしそれは超越的批判であって直接関係しないのだが——じつはなお一つの論点が準備されていたので、それについ

ても最後に簡単にふれたい。すなわち氏の最初に指摘される問題の第二点である。

それは氏によれば、本書が独占価格の理論についてなんらの考慮もはらっていないという点である。氏は「ここに本書が有している一つの限界をみいだせるとかんがえる。」そしてその原因は、アプローチの方法にあり、その方法においては「当初から不可能(理論的に)なこと」だときめつけられるのである。そのアプローチの方法の当否についてはすでに論じたので、ここでくりかえす必要はないが、『資本論』の原理的意味と、その原理としての限界性についてはのべておく必要がある。独占価格論への適用を、マルクスの価格の原理規定にもとめることが、ないもの、ねだりである理由がはっきりするとかんがえるからである。

周知のように、マルクスの『資本論』は、その目的を近代ブルジョワ社会の経済的運動法則の暴露においている。それは十九世紀中期のイギリスを典型にとりながら、純粋な資本主義社会を想定してそこに資本主義の経済的運動法則の展開をみるという方法をとっている。しかしながら、マルクスが『資本論』を執筆した頃には予想されなかつた経済のあらたな展開は、純粋な資本主義化の想定をそのままではゆるしえないものとしたのである。ここにレーニンの『帝国主義論』にみられるような段階規定の媒介が、現実の経済過程の分析のために必須のものとして登場した理由がある。それは、金融資本の段階においては、資本主義の経済的発展がその純粋化傾向を阻止するものとしてあらわれてくることに対応するものといわ

れている。純粋な原理的展開においては、利潤率の不等が価格の変動をおして均等化されていたのたいして、金融資本段階にみられる固定資本の巨大化傾向は、資本の自由な移動を阻害し、利潤率の不等をもみちびかざるをえない。それは価格変動による利潤率の均等化傾向を消滅させるものではなく、また価格変動による修正をうけるとしても、その利潤率の不等は、客観的基準によって均等化されうるものではない。そのように資本の自由移動を阻害する条件の出現によって、平均利潤が独占利潤に転化しうることをみとめるとしても、その独占利潤が原理的に規定されえないものであることはあきらかであろう。特定の歴史的偶然的要因や、特定の市場や個別の産業を、一般的に独占価格決定の機構のなかに導入することの不当性は、容易に理解されうるのである。したがって、これをもし理論的に説明しようとするれば、飯田氏の意図するところとはまったく逆に、価値概念を放棄した価格理論の形式性にゆだねる以外にな

いことにならう。かくて、われわれの意図が、マルクス生産価格論になおこの疑問の解明と、その原理的規定の問題に限定されているものとすれば、その価格理論に独占価格の解明をもとめることは、たんにないもの、ねだりであるというばかりでなく、まさに「当初から理論的に不可能なこと」だったのである。

以上、飯田氏の書評における批判について、反論すべき点をのべたのであるが、氏について筆者はあるいは不当な誤解をおかした点があるかもしれない。しかし、それにもかかわらず、氏の批評にたいして、筆者が不十分であった表現をおぎない、筆者の意とするところをあらためてあきらかにしておくことは、評者にたいする筆者の礼儀でもある。あえて反論をのべさせていただくゆえんである。

日頃畏敬する飯田氏にたいして、不穏当とおもわれる言辞をもちいた点があれば、ひたすら御寛恕をお願いするほかない。